童話　「Felimo～おっちょこ妖精のすてきな贈り物」

カーティス・N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
童話　「Ｆｅｌｉｍｏ～おっちょこ妖精のすてきな贈り物」

【Ｎコード】
Ｎ７４９５Ｅ

【作者名】
カーティス・Ｎ

【あらすじ】
土もなく草も生えていない灰色の町に生まれた花の妖精フェリモ・・・彼ができることとは・・・

フェリモは　花の妖精です。
仕事は、もちろん　きれいな花をさかせること。

だけど、ほかの花の妖精とちがって、背中には羽根がはえていません。
だから空はとべず、小さな杖をもって、ちょこまか歩くばかりです。

そんなフェリモは
「ふぁー、ひまひま」と、毎日　あくびばかりしていました。

というのも、
「オイラの生まれたこの町は、アスファルトの道とコンクリートのビルばかり、草のかけらもありゃしない。おまけに人間たちとくりゃ、いつもせかせか働いて、花のことなんて忘れちまってる」
というわけなのです。

ときどき、ほかの花の妖精たちが、空の高い所をとんでいくのが見えました。

「おーい、みんな、遊びにおいでよ」
なんども大声でよびかけましたが、妖精たちは気づきませんでした。
草も木もない灰色の町は、花の妖精たちには見えなかったのです。

「もうオイラ、こんなところ　ごめんだ」
フェリモは一度、町を出ていこうとしました。

でも、町境をこえようとすると、からだがフニャフニャになって、かないませんでした。

羽根のない妖精は、生まれた町ですごすしかなかったのです。

仲間もおらず、いつも、ぶらーり　ふーらふら・・　・・

「どうしてオイラは、この町に生まれたんだ」

ある日、高いビルの屋上でさけびました。

すると、空を走ってきた風の妖精が、ヒュルンととまって聞いてきました。

「どうして、わたしは空を走っているの？」

「そりゃ、走って風をおこすのが、あんさんの仕事だからよ」

答えてあげると、風の妖精はうれしそうにおじぎをして、ピューッと走っていきました。

「フェリモくん、わしにも教えておくれ」

おどろいたことに、今度はビルの妖精が聞いてきました。屋根から、かたそうな頭をのばしています。

「なぜ、わしはここに　たっているんだい？」

「そんなのきまってる。この町の人が、あんさんの部屋を使いたいからよ」

「なぁるほど」

ビルの妖精は、お礼もいわずに、コンクリートの中にきえました。

「なんだいなんだい。聞きたいのは、オイラのほうなのに」
フンッ！
と　ビルをけろうとしたところ、
おっとと・・勢いあまって足をふみはずし、地面にまっさかさま。
ゴチン！
頭に大きなコブを作りました。
「いってて。おやおや、ほほーう」
頭をなでたフェリモは、大事なことに気がつきました。
「オイラ、自分にきちっと聞いてなかった。ねえ、オイラって、なんで　この町に生まれたんだい？」
お店のガラスにうつった自分に聞いてみました。
でも口は、むっつり　とじたまま。
「えーい、聞きかたがわるかったのかな。コホン、ぼ、ぼくちんって、どうしてこの町に生まれたのかしら？」
すると、ガラスの中の自分が、もじもじしながら答えました。
「みんなと同じ。あんたさんが　ここに生まれてきたのにもわけがあります。そのことに気づいていないだけなのです」
フェリモは自分の姿をじっと見つめました。
「仲間とちがって、オイラにゃ　羽根がはえていない。そのかわりに、こいつをもっている」
そういって、杖をブラブラふってみました。

「でも、ジイちゃんの妖精じゃあるまいし、なんで　こんなもん持ってんだ？」

フェリモは、杖をあれこれ使って歩きはじめました。
地面をコツコツついたり、高い所にひっかけたり、くるくる回したり・・・いろんな方法をためしました。

そうやって、町のはしからはし、建物の地下から屋上まで歩きました。

「とうとう、こんなところまで来ちまった。だのに、なんにも起きなかった」
町のはずれにある鉄塔を登りながら、フェリモはぼそぼそといいました。

だけど、
「おやや」

鉄塔のてっぺんから見おろした町は、何かが変わっていました。

灰色のビルも道路もそのままです。木や草がはえている様子はありません。

目玉がこぼれそうになるくらい　じっと見て、やっとわかりました。
町全体が、温かそうなうすい黄色の光に包まれていたのです。

「あれは、お花にお日さまがあたったときの光じゃないか。なんだい、花なんてさいてないくせに。この町はオイラをバカにしてるのか」

あんまり腹がたったので、町にむかって杖を投げつけました。

「へへーン、ざまあみろってんだ・・・・おんや」

あっかんべーをして、大きくのばした舌が、ベコーンとのどの奥にはじきかえりました。

くるくると回りながら落ちていく杖からは、黄色の光が流れ出ていたのです。

「なんてこったい。あの光をばらまいたのは、オイラだったってことか」

あわてて宙にとびだし、杖をつかまえました。

そのまま地面に、ゴチン！！

またまた、頭に大きなコブを作りました。

「いてて。でも、痛いどころじゃない。なんでオイラ、こんな光をバラまいちまったんだ」

フェリモは、頭をすっきりさせるために、コブをつつきながら歩きはじめました。

「いてて、オイラは花の妖精。そんだけど、生まれた町にゃ　草も木もない。いてて、そんでもって、オイラはお花の光をばらまいた。そんでそんで、そのわけはとくりゃ」

答えが見つからないまま歩いていくと、おかしなことにぶつかりました。

人々が、しきりに首をかしげていたのです。
楽しいことを考えているように、顔はにこにこと笑っています。
車に乗っている人、ビルの窓から外をのぞいている人も、みんなそうでした。

「おいおい、どうしちまったんだい。いつものせかせかは、どこにいっちまったの？」

フェリモは、姿が見えないのをよいことに、前にたつ男の人のほほをつねりました。

『あたた！だれかにつねられてもわからない。これまでなかったけれど、今はここにあるみたい。それはいったい何なんだ？』
男の人は、にこにこしたまま　いいました。

耳をすませば、みんな同じことをつぶやいています。

フェリモはピーンときました。

「そりゃ、お花だよ。あんさんたちゃ、半分わかってるんだ。それなのに、はー　じれったい」

フェリモは、人々の耳をひっぱって広げ、
「それはお花！」
と　どなりました。

でも、人間には、妖精の声はとどきませんでした。

『まあ、あれは？！』
フェリモの横で、女の人が空を指さしました。

みんなが見上げた先には、黄色、むらさき色、白色、いろんな色のものが、ひらひらと飛びかっていました。

『あれはチョウチョウ。ということは、ここにあるみたいなものは、えーと、うんと・・』

のどにつかえものをしたようなメガネをかけた男の人の背中を、

「それ、もう一声！」

フェリモは杖でコツンとつつきました。

『花だ！それも町いっぱいの花だ』

男の人は　うれしそうにさけびました。

『そうよ。花よ』

『チョウたちは、この町が花にあふれていると思って、遠くの森からやってきたんだわ』

みんな口々にいいました。

「やれやれ、やっと、おわかりですかい」

どなりつかれたフェリモは、地面にへたりこみました。

『ずっと前から、この町には、何かがたりないと思っていた。チョウをさそってくれたものが、それを教えてくれた』

仕事はそっちのけ。

人々は力を合わせて、花をさかせるための花壇を作りはじめました。

なにせ、もともと働き者の人々のやることです。

あれよあれよという間に、町じゅうに花壇のわくができました。そして、となり町からとりよせた土をしき、種をまきおえたのです。

『ああ、ここに、花の妖精というものがいてくれたら』
『そのよび声で、すぐに花がさくでしょうに・・・』

フェリモはよいしょと立ち上がりました。
「ちっとは休ませておくれよ。また町じゅうを歩かないといけないんかい」
ぶつぶついいながら、歩きはじめたフェリモでしたが、よいことを思いつきました。

杖をつきながら、よたよたと町の放送塔までいくと、マイクにむかっていったのです。
「オイラの友達、お花さん。お目々ぱっちり、かわいいお顔。どうか見せてちょうだいな」

大きなスピーカーからとびだした声は、町じゅうの花壇をぶるぶるとふるわせました。

土の中の種が、たちまちむくりと芽を出しました。
そして　ずんずんのびて、色とりどりの花をさかせました。

・・ほれほれ　さいた、わいわい　さいた・・
人々の喜びにあふれた声が、放送塔まで聞こえてきました。

「ふぁー、オイラ、つかれちまった」
大きなあくびをしたフェリモは、ゴロリと横になり、ズウズウといびきをかきはじめました。

「まあ、なんて、かわいいお花たち」

「いったい、だれかしら、きっとすてきな仲間がいるんだわ」

あれまあ、これまで通りすぎていた花の妖精たちが集まってきています。

フェリモは、そんなことにはおかまいなし。

幸せそうな顔をして、寝言をいいました。

「ムニャムニャ、もう、仕事はかんべんしておくれ。オイラはすんごくねむいんだ」

おわり

『The wonderful gift from Felimo』

Felimo was a flower fairy.

Naturally, his work was to make plants in bloom.

However, Felimo didn't have wings unlike other flower fairies.

He couldn't fly around, just wa

lked restlessly with a cane in his hand.

Felimo had been always yawning every day.

”It's tedious... boring.”

Because,

”This town where I was born is covered with asphalt roads and concrete buildings, and doesn't have even a fragment of grass. Additionally, people in this town devote themselves to work, and have forgotten any flowers.”

He sometimes saw other flower fairies flying past high up in the sky.

”Hi!... Hey!... Come down everybody... Let's play together.”

Felimo called out loudly, but fairies didn't notice him.

The flower fairies couldn't see the gray town where any grasses and trees didn't exist.

”I want not to be here anymore.

"Why was I born in this town?"

One day, he cried out to the roof of a high building.

Then, a wind fair run in the sky stopped in front of his house.

"Why am I running in the sky?"

"It is because the wind blow your work run."

"Oh, I see. Thank you."

"Thank you."

The fairy bowed happily and ran in the sky.

Felimo had decided to go out to the town once.

He was born in the town, where he lived in the town boundary.

The wings fair had to spend the rest of his life living in the town.

The town was whole, no one was born.

The town was full of people, no one was in the town.

The town was full of people, no one was in the town.

The town was full of people, no one was in the town.

"Give me an answer, too."

To Felimo's surprise, this tiny building fairy asked extending its hard head from the roof.

"Why am I standing here?"

"It is simply because the people living in this town want to make up

"Indeed."

The fairy disappeared in concrete without saying any thanks.

"Impolite fellow! It's just me who wants to ask a serious question."

"Hun! He was about to kick down the building.

"To t. Woo-wah"

Hello, this balance, and fell down head first on ground.

Thud!!

He got a big bump on his head.

"Oh! That hurts."

He stroked his head gently.

"Somehow, it occur to me."

Felimo gazed on his reflection. Underneath it out yet. "Yours have been here. Yours have been for

"Everyone is the same." Naturally, there is a reason why you were born in this town

"Not at all." The reflection said. "Not at all." The reflection said. "Why I was born in this town

"Hum," the way asking was impolite," was asn't it? Well.. Wou ldn't mind asking my question why I was born in this town

"Hum," the way asking was suddenly. However, his reflection in the window would not open its mouth

Helimo thought of an important thing.

Felimo

"I've never asked to myself." "Telling me why I was born in this town?" "Hopeless. Hopeless and asked the window of a

“I don't have wings unlike other flower fairies, but I have this instead.”

He shook the cane in his hand.

“But why do I have such a thing though I'm not an aged fairy?”

Felimo began to walk using his cane in various ways, poking ray roads, hanging on high places, turning round and round and so on.

He kept walking from underground to rooftops of the buildings, from edge to edge of the town.

“I have come to such a place at last. But I didn't find out anything. My cane caused nothing.”

Felimo murmured with a disappointment, climbing the iron tower that stood at the town boundary.

However,

“Oh! What!?”

Something changed in the room where the grey sand roads were the same as they were. The Felimo watched the town with his yellow eyes. And he felt the light. "Thats the lighthouse." Some thing had changed in the town. The people stood around the square, looking at the lighthouse. It was a tall, stone tower, painted white, with a red roof. The lamp inside was a small, glass room with a large, brass lens. The Felimo could see the light from his window. It was a pale, yellow light, flickering in the wind. The people were talking, their voices low and worried. "The light is out," one said, pointing to the tower. "The keeper is gone." The Felimo could see the light from his window. It was a pale, yellow light, flickering in the wind. The people were talking, their voices low and worried. "The light is out," one said, pointing to the tower. "The keeper is gone." The Felimo could see the light from his window. It was a pale, yellow light, flickering in the wind. The people were talking, their voices low and worried. "The light is out," one said, pointing to the tower. "The keeper is gone." The Felimo could see the light from his window. It was a pale, yellow light, flickering in the wind. The people were talking, their voices low and worried. "The light is out," one said, pointing to the tower. "The keeper is gone."

cane falling round.

”My God! That's me who had scattered the light!”

He jumped out in the air panicking, and caught the cane.

Thud!!!

He got a big bump on his head again.

”Oh! That hurts. But it doesn't matter. Why had I scattered such a light?”

Felimo began to walk with patting two bumps to make his head clear.

”Ouch! I am a flower fairy. But this town where I was born doesn't have even a fragment of grass. Ouch! And I had scattered the light of flower. What is the reason why?”

He was walking back seeking for the answer, then he met a strange thing.

People were inclining their heads to one side. Their looks were cheerful as if they had been thinking something pleasant. All the people who were looking out of the window of the buildings, who were in their cars and so on had the same looking.

”Hey, what's the matter? Where did you leave your usual bustles?” Ferimo invisible to the people pinched the cheek of a man standing in front of him.

”Ouch, I can't find out what is here now that had never been here before, even though I'm pinched by somebody.” The man said with a smile.

Listening carefully, Felimo knew that everyone was saying the same sentence.

The answer people wanted to kn

ow flashed into Felimo's mind. ”The answer is a flower. You are ready to find it out. Hum I'm losing patience.”

Felimo pulled people's ears to open wide, and shouted in ”It is a flower!” But fairy's voice couldn't reach the people.

”Oh dear, what's that?!” A woman beside Felimo pointed at the sky.

Where all the people looked up at, there were a number of something fluttering, white, yellow, violet and so on.

”I'm sure that those are butterflies. Then, let them see... Whateseems to be here is a...”

”That's it. One more word.”

Felimo poked the man's back who wore glasses and looked sticking something in his throat.

”A.. flower! It's not a flower but a great number of flowers that fill all this town.

The man shouted happily.

”So they are. Flowers.”

”Butterflies came from a distant forest, thinking that this town is filled with flowers”

People said unanimously.

”Well, you have barely understood, haven't you?”

Felimo very tired from shouting lay down on the ground.

”We have felt the lack of something for this town all the time. What had invited the butterflies taught it to us”

Putting their works asideward, people began to make flower beds hand in hand.

You know the people were all hard workers, so they soon made up the frames of flower beds, got the rich soil from the next town, and at last they sowed the seeds.

”If the flower fairy was here, the seeds would grow and blossom quickly by his magical charm.”

”Yo—ho.” Felimo stood up with a great effort. ”I want a short rest.” But you say 'walk about the town and do your work', don't you?”

Felimo began to totter murmuring, but on his way he got a good idea. He staggered with his cane to the broadcasting tower that stood in the center of the town. And when he reached there, he spoke through the microphone.

”Every plant, friend of me, open your bright eyes and show me your lovely face!” His voice that went out from the big speaker shook the flower bed in the whole town tremblingly.

The seeds in the soil put thei

"Hurrah! How wonderful! We have got it!"

The cheers filled with people' pleasure overflew in the heart of the crowd. "Fah, I became entirely tired of casting the broad shadow of the tower.

With a big yawn, Felimo layed down and soon began snoring.

"Hurrah! How wonderful! We have got it!"

The cheers filled with people' pleasure overflew in the heart of the crowd. "Fah, I became entirely tired of casting the broad shadow of the tower.

With a big yawn, Felimo layed down and soon began snoring.

"See! What lovely flowers they are!"

"Who did that? A wonderful company is surely living in that town."

The flower fairies that had passed by, now got together and up in the sky.

But Felimo didn't care that at all and talked in his sleep that night.

"Please give me a break... I'm terribly sleepy."

the end

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7495e/

童話　「Felimo～おっちょこ妖精のすてきな贈り物」

2011年1月27日06時08分発行